

「連想実験」とコンプレックス理論

－いわゆるユングの「言語連想検査」の臨床的意義と手続き試案－

“Association Experiment” and Complex Theory

－ on the clinical meanings of Jung’s so-called “Word Association Test”
and tentative proposals for the procedures －

広瀬 隆

Takashi HIROSE

要約

本稿の目的は、日本ではしばしば「言語連想検査」として紹介されているユングの「連想実験」の意味を問い直し、その実験手続きを試験的に提示することにある。心理アセスメント法として標準化の手続きに従う多くの検査とは異なり、この検査は必ずしもその妥当性や信頼性が確立しているものではない。しかし、規定性の乏しい1語の言語刺激が被験者の無意識に働きかけ、コンプレックス内容が引き出され、それを手がかりに絡み合ったコンプレックスについての仮説が導き出されうる。また、連想実験は、心理療法の過程で用いられる時に、被験者のコンプレックスを賦活し、心理療法の過程にも影響を与える技法としての側面ももつ。ユング派の訓練過程で現在も取り入れられているこの実験・検査の心理療法場面での意味合いを浮かび上がらせながら、そのより実用的な手続きを提示することを目的とする。

Abstract

The purpose of this paper is to reexamine the meanings of Jung’s “Association Experiment” or “Word Association Test” and to propose tentative procedures for the experiment. Indeed, the “Association Experiment” is different from other psychological tests whose validity and reliability have been certified, but the experiment inspires complexes and gives important information about the unconscious contents. At the same time it can assist with psychotherapeutic processes. It has been adopted for Jungian training for a long time. The author tries to clarify the meanings of the experiment and suggests more practical procedures.

Keywords : C.G. Jung, Association Experiment, Word Association Test, complex

1. 分析心理学とコンプレックス理論

「コンプレックス」という語は日常でしばしば用いられながらも、その意味合いが十分にとらえられがたい用語の一つである。時には劣等感と同一の意味で用いられることあるし、言い換えや定義を求めても使う本人ですら曖昧にしか答えられないことがままある言葉であろう。

「コンプレックス」(complex) の語源を辿ると、深層心理学で問題とする意味合いが浮かび上がるように思われる。接頭辞 com- は together を、接尾辞 -plex は to fold を意味する。つまり、日本語の日常で使われる劣等感の意味ではなく、互いに関連しかつ折り重なるという意味合いが浮かび上がる。それ故、英語では、形容詞で使えば「複雑な」、名詞として使えば「複合施設」のような意味合いになり、抽象語としては「絡み合ったもの」「複合体」のような意味になるわけである。河合 (1971) はユングのとらえようとしたコンプレックスを端的に「無意識内に存在して、何らかの感情によって結合されている心的内容の集まりが、通常の意識活動を妨害する現象を観察し、前者のような心的内容の集合を、感情によって色づけられた複合体とユングは名づけた。」と記している。のちに河合自身も触れているように、コンプレックスが本来意識できず統制することが難しいことを考え合わせれば、ここでいう感情という語は情動と置き換えた方がより適切であろう。Meier,C.A. (1968) によれば、ユングがこの語を用いたのは、「いわゆるオカルト現象の心理学と病理学」(1902) で「自我-コンプレックス」という用い方としたのが最初とされる。ここでは既に意識の統制主体としての自律的な働きをする心的仮説構成概念としての萌芽を見ることができる。つまり、自我が意識の中核としての自律的存在であり、かつ他の無意識的コンプレックスと力動的関係にあるということが読み取れる。さらに、コンプレックスは、ある中核となる、言い換えればある元型的な力と結びついていると仮定されている。時にほんのわずかな刺激によって、それにまつわる情動的な反応が合理性を欠いたまま呼び起こされる。コンプレックスが意識の統制を超えて働く例として、凍り付いたり、行動化に走ったり、あるいは感情を爆発させたりといったことが考えられる。Bisagni,F. (2009) によれば、コンプレックスは必ずしも孤立して情動負荷が高いままにとどまるとは限らず、不調和な状態のまま他のコンプレックスあるいは自我(自我コンプレックス)と関係をもち、そうした不調和の結果、制止やとりつかれ、取り乱しや心気症的あり方が生じうる。一方で、連想実験におけるコンプレックスの賦活の肯定的側面について、Hill,J. (1975) は、連想実験において自我の優位性が脅かされ、1つの「挑戦」(challenge)となる可能性について言及している。いわば、自我による意識的な統制を離れたところで反応が自発的に起こり、「部分人格」(partial personalities)が賦活されるのである。この観点からすると、混乱した反応も症状も神経症も、単なる劣悪な克服すべき状態というばかりでなく、自我統制を脅かす個性化への契機ともなりうるのである。Hill,J. はプラトンの饗宴にある「蛇のひとかみ」(a snake bite)とのパラレルについて言及しているが、この比喩は時に心理療法が快適なばかりではなく、情緒的不調和を一時的にもたらさざるをえないことを

比喩的に表している。意志や理性によって統制され、時に硬直した自我意識に対して、無意識的内容との対話の契機を夢や他の無意識的素材と同じく、連想実験もまた提供しようと考えられる。

心理療法の課題のひとつは、個性化あるいは自己実現の可能性に影響を与える内的なコンプレックスの理解、そしてできればその拘束からの解放である。それと同時に、Fordam, M. (1969) のいう「脱統合」(deintegration) の契機でもあり、必ずしも「再統合」(reintegration) の保証がない中で辿るプロセスでもある。後者はいわば心理的な地殻変動の経験であり、大きく景色を変動させる作業である。

ユング心理学ではコンプレックスを重要なキーワードとして用いており、Freud, S. の精神分析学に対してユングの心理学をどのように表現するか提案として、Wolf, T. や Meier, C.A. が「コンプレックス心理学」を適当と考えたのもそれなりの意味あつてのことである。最終的にユングの心理学は「分析心理学」と称されることになるが、コンプレックス理論がユングの心理学、とりわけこころの力動的なあり方の理解に対して果たす意味合いは大きい。

今回問題とする「連想実験」あるいは「言語連想検査」は、ユングが30代でブルクヘルツリ精神病院に入局した頃、精力的に取り組んだ課題の一つであり、コンプレックス理論と強いつながりをもっている。ある刺激語に対して、突然強く心を動かされたり、まったく反応語が思いつけなかったりといった意図せずに起こる反応から、その人なりのコンプレックスを見いだそうとするのがこの実験または検査である。

「実験」と呼ぶのか「検査」と呼ぶのかについても考えてみたい。ユングは多くの場合「連想実験」という語を用いているが、これについては、臨床的に何を目的とし、どのように利用するかによって依拠するところが大きいと筆者は考えている。自由連想法とは異なり、ある種のテスト手続きを含むという理由で、Kast, V. (1980) は「連想検査」(Association Test, AT) という名称の意味あいも認め、訓練用マニュアルの中では、ATと「連想実験」(Association Experiment, AE) という名称を織り交ぜて用いている。また、培風館発行の心理臨床大辞典(2004)での項目に見られるように、日本においても「言語連想検査」という名称で取り上げられることが多いようである。一般に、ユング派の心理療法では、面接当初の診断なり見立てを重視するよりは、毎回のセッションを見立てに利用するという基本姿勢を取る分析家あるいは心理療法家が多いと思われる。それは、きわめて深層心理学的な見解に彩られている。無意識的な内容は時に影を潜め、時に顕著に現れる。それは必ずしもクライアントの計算によるものでもないし、あるいはセラピストの見通しによるものでもない。もちろん、アセスメント的な受け入れ面接による情報とそれに基づいた見立てには十分注意を払うにしても、その後の予測を超えた心的内容の顕現は、なにも病理的側面だけに限らず、治療的・創造的内容においても経験されるであろう。Kast, V. はこれを「創造的無意識」(creative unconscious) と呼んでいる。こうした点からすると、一連の試みはコ

ンプレックスを賦活させる心理療法過程の1つとして組み入れることが期待されるであろうし、筆者は必ずしも客観的に信頼性を保証されたテストとしての位置づけを望むことはない。むしろ、その時その場でのコンプレックスの現れを期待するという点では、テストよりは箱庭療法や風景構成法のような技法に近いという気すらする。そうした意味で、呼称という点では、両方が慣例的に用いられるのは許容するとして、「言語連想検査」というよりは「連想実験」と呼ぶ方がより適切であるように筆者には思われる。

19世紀後半に、ガルトンやヴァント、エビングハウス、クレペリンといった面々が言語連想についての実験を発表する中で、ユングは、連想実験を行いながら、刺激語に対してどのような反応語を答えるかだけでなく、反応時間やため息、笑い、体の動きや表情等の中にコンプレックスの働きを求めようとした。これは、ロールシャッハ・テストにおいて、その反応だけではなく、いかに見るかという知覚のプロセスを問題とした卓見を彷彿とさせる。全集第2巻によれば、ユングは必要に応じて反応語を入れ替えたり、刺激語の数を調節したりして連想実験を行っている。その目的は、コンプレックス指標を通じての心の理解、とりわけ自我と無意識との関係をとらえることであった。ユングの行った一連の作業はまさに実験的であった。ユングは、1935年に行ったロンドンのタビストック・レクチャーの中で、30代半ばの男性に試行したAEについて触れている。(Jung (1968)) そこでは、ユングは、その男性が外国で酒に酔ってナイフで人を刺したという過去の出来事を、AEを通して見抜いたと述べられている。鍵となった刺激語は、ナイフ・槍・叩く・とがった・ピンであり、反応時間の遅れをはじめとして、男性は混乱を示した。これはこれであり得ることとして認めるにしても、本論で提起するAEの目的とは異なる。Kastは、1980年の時点でも、もはやこうした直接的な行動との結びつきをとらえることがAEの目的ではない旨を記している。これは、コンプレックスが夢に現れるときと同様の考えを適用することでよりよく理解できるであろう。例えば、夢の中で人を刺す夢を見たからと言って、直ぐさまその人物を刺したという事実を推測したり、あるいは刺したいという衝動を推測するのは、現代の夢の理解としてはあまりにもお粗末であろう。その人物に対する連想やその人物の特性、刺すことの意味等、文字通りの意味に取るよりはその象徴的な意味合いをクライアントとともに探っていく態度が必要であろう。あるいは、夢理解のための客体水準と主体水準の可能性1つを考えに入れても、そうした直線的な類推は解釈というには危険を伴う。そうした意味で、AEから推測される内容理解は、コンプレックス理論を通してみたとき、夢の理解ときわめて近い過程を経るべきだと考えられる。筆者は特に心理療法過程の中での意味合いを重視し、テスト手続きで恣意的な意味付与をするのではなく、コンテクストについて話し合う中で浮かび上がるコンプレックスを拾い上げる作業を重視したい。

この小論文の目的の一つは、日本での連想実験の臨床的な利用についての提案を行うことにあり、いわゆる標準化を目指すことではない。ユング派の心理療法になじみのある者であれば誰も

が同意するであろうが、施行手続きそのものも夢について連想を求めるような手続きであり、解釈仮説についても、臨床素材との照合の中で構築されるべきであると考えられる。そうした意味で、刺激語の検討やコンテキストの利用をはじめとして、臨床場面で実践的に使い、かつ深層心理学的・力動的な心理療法を促進するための手続きを提案することにする。

2. 連想実験—その手続きについての試案—

AE はあくまで心理療法の中で、とりわけ個別的なクライアントとセラピストとの関係をもととした理解の中で行われることで最も意味をもつと思われる。しかし、同時にある共有された実験手続きがないと、臨床活動の中で共有できる外形をもたなくなってしまう。ドクマティックに硬直化させないことを前提として、とりあえず共有できる足場を書きとどめておくことは必要かと思われる。ユングの連想実験の手続きを一般の成書に求めることは難しく、かつ唯一の基準をマニュアルとしてまとめることは意味がないことである。ここでは、特にスイスの C.G.Jung Institute や ISAP (International School of Analytical Psychology) でえた知見を手がかりに、いくつかの試論を提示しながら、最終的に日本の臨床場面で実用に耐える試案を提示してみたいと思う。

先にも記したように、ユングが目にしたのは、連想内容そのものよりは、刺激語による情動負荷であり、それによって反応がブロックされるという点である。その現れとしてコンプレックス指標が用いられているわけであり、指標としてとらえるべき現れはクライアントごとに異なる可能性もある。一般に被験者は反応の遅延として情動負荷を示すことが多く、これは見逃しがたい指標である。Jung (1968) 自身も反応の遅れが重要だと述べているし、Winer, R.I. (2005) も、個人的には反応の遅れがコンプレックス解明の本質 (the sine qua non) だと考えるとしている。これには、筆者の少ない経験からも同意できる。しかし、またあるクライアントは表面的で情動を回避できる反応を即座に出すことによって、情動負荷を回避するかもしれない。そのように考えると、ある反応様式が常に同じ心理機制を示しているとも考えにくいわけである。それゆえ、この指標に対して一元的な意味を付与するのではなく、コンプレックス指標の種類や多寡、他の刺激語との関連・連想・あるいは後に求めるコンテキストの内容から、被験者のコンプレックスの有り様を推測することになる。

(1) 連想実験の目的

連想実験もまた、他のアセスメント法と同様、クライアントに負荷をかけ、かつ心理的な影響を与える。まず、その目的を明らかにして施行するのは、他のアセスメント法と同様である。ここでは、連想実験特有の性質を考慮した上で、その目的を列挙することにする。

(a) 心理療法の最初の見立てを構築するために

連想実験のもつテストとしての側面は、クライアントが主訴として提示できないこと、セラピストが言語的訴えから推測しにくいことについての情報を提供する。Kast (1980) は心身症の患者や 10 歳以上の子どもに対する有効性について触れている。確かに、言語で十分訴えがえられないという理由でこうしたクライアントへの適用の有用性をあげることもできよう。しかし、こうしたクライアントの場合、AE によってえられた素材をもとに言語なりイメージなりを使ってより拡充していくことが難しいとも思われる。確かに、仮説的に無意識内容の推察はできようが、セラピーの素材として扱って行きにくい場合、セラピストの思い過ごしに終わる危険をもわきまえておく必要がある。しかし、同時に Vezzoli, C. et al. (2009) が示しているように、AE ではその評価に検査者側の逆転移による連想がひと役買い、それを自覚した上で修正していくという姿勢もまた求められ、必ずしも最初から中立的・客観的な評定が求められるわけではない。そうした二律背反的な態度をもちかつ自覚しておくべきところは、関係性を重視するすべての心理療法と共通するところであろう。

(b) クライアントの無意識を賦活し、情動負荷の高まりを期待して

力動的・深層心理学的面接を継続中に、クライアントが無意識的な素材をそれほど示さない状況や、心理療法の進展が滞っていると感じられるときの 1 つの素材として AE を導入することも考えられる。もちろん、クライアントが同意するかどうかは確かめる必要があるが、適当な時期にセラピストが勧めてみるのも一法であろう。

(c) 心的内容物の容器としての働き

AE は、どのような状況で、どのような検査者によって行われるかによって大きく影響されると考えられる。セラピーの進展状況にも、信頼関係にも左右されることは間違いない。単なる 1 つの語による刺激と反応の対をもとにするが、言葉にしないまでも、どれほどの心的内容物がここに浮かんでくるかは、まず被験者としての体験をすればよくわかる。自ら訴えること、言語で説明することが難しく、かつ絵や箱庭には乗りにくいクライアントには有効なことがある。

(d) 訓練の 1 課題としての連想実験

ユング派指向的な心理療法家養成の訓練課題のひとつとして連想実験は多くの場合取り入れられている。コントロール・ケースワーク（スーパーバイズを受けながらの実際のケース担当）の中で、自らが担当する臨床ケースに対する施行及び解釈、そしてグループでの発表と討論が行われる。それは、伝統的な課題であるという理由の他に、心理療法のやりとりの中で、クライアントの引っかかりに気づき、コンプレックスやその中核となる問題を推測する訓練としての意味合

いが大きいと思われる。

(2) 連想実験手続き試案

ユング派の分析家養成コースでは、連想実験についての一連の施行手続きを記した手引きがある。筆者もスイスの ISAP では、Kast, V. (1980) (以下 Kast と記す) によるドイツ語版を英訳した手引きを準備のためのセミナーで手に入れ、それに従ってはじめて施行した。残念ながら、今のところその邦訳版は出版されていないが、本稿では随時引用させて頂くことにする。なお、他の心理テストでも同様であるが、AE でもまず自らが被験者となることが推奨されており、筆者も同じ日本人の留学生に依頼して自らの結果を得た。単語という短い刺激をもとに行い、かつ単語が単なる意味記憶としてだけではなく、エピソード記憶をも巻き込んだコンプレックスが体験できた。母国語つまり自らの経験をつなぎ止めている言語以外で実施するのは、可能であるにしても、多くの心の内容物とのつながりを切り離して行うことになると思われる。こうした問題は、外国語だけにとどまらず、地方ごとの方言においても起こるのではないかという議論を AJAJ (日本ユング派分析家協会) のセミナーにおいて交わしたことがある。言葉のイントネーションが被験者の理解や経験喚起に影響を与えるのではないかという問題である。これについては刺激語について考察する際に立ち戻りたい。

ここで手続きについて Kast をもとにまとめてみるのは、まず、日本で AE を施行する際にまとまったマニュアルが存在しないことによる。ほとんどがその紹介にとどまっており、成書として詳しいユング全集 2 巻のある部分を邦訳した「診断学的連想研究」とマイヤーの「無意識の現れ」だけでは、施行法を十分に知ることは難しい。確かに、標準化することを第一義としない AE であるにしても、踏み台となる施行法がなければ自分なりに工夫するための足場がえられない。ただ、手引きを日本語に翻訳するだけでは、日本語であるが故に起こる問題や、日本の心理療法の事情にはそぐわない面が考慮されない。そうした意味で、日本の実情にあった実用的な手続き試案を作成するのが本論の目的の 1 つである。

(a) 施行場所・時間と検査用具

多くの場合、心理療法の過程の中で行われるであろう。それにふさわしい落ち着いた部屋が確保されればよい。通常、対面あるいはそれに近い心理療法を行うセッティングを用いることで何ら問題はないであろうし、その方がクライアントは自然に取り組めるであろう。時間については考慮する必要がある。日本では通例、50～60分を 1 セッションとしているセラピストが多いと思われるが、60分で次のクライアントが来る状況では、不可能ではないにしても、無理があろう。特に、第 1 施行と第 2 施行との間の休憩時間を 20 分 (あるいはそれに近いくらい) 取り、かつ試行後の感想のための時間を十分に取ろうとすると、2 セッション分の時間は確保しておきたい。

感想を聞く段階で、被験者自らがコンテキストの内容を語り出すこともあるので、時間への配慮はきわめて重要である。

(b) 教示

以下のような内容が伝わるように、被験者の年齢や特徴によって工夫すればよいであろう。

「これから 100 個（場合によっては別の刺激語数）の言葉を 1 つずつあげていきます。それぞれの言葉を聞いて、最初に思いついた言葉をできるだけ速く答えてください。できるだけ 1 つの言葉で答えてください。私は時間を計って記録します。」

最初に思いついた語を答えるという点は必要があれば、繰り返しておいた方がよいであろう。考案された時点では、教示が理解されているかどうかを確かめるためのリハーサルについては考慮されていないが、Kast は、特に子どもや不安の高い被験者に対しては、影響のない範囲で“a dry run”（試し）を行うことを示唆している。例えば、「雲」を例に挙げてみると、被験者によって、「雨」とすぐさま答えるものもあれば、「空のくもですか、虫のくもですか」と尋ねるものもあろうし、また「自由に思いついたものでいいですよ。」と確認してから答えるものもあろう。いずれにしても、最初に思いついた語を思いつくまま自由に速く答えるということが理解されればよい。施行法が理解できれば十分なので、のちの反応への影響を避けるため、試すにしてもできれば 1 つの例にとどめておきたい。

(c) 刺激語

刺激語については、①刺激語数と項目内容 ②翻訳を巡る問題 ③日本語であるが故に起こる問題 ④方言を巡る問題等、検討すべき事柄が多く残されている。

まず、①刺激語数と項目内容については、ユング全集の 2 巻を見たところでその移ろいに圧倒されることになり、準拠すべき刺激語を決定できない。刺激語を提示した日本語で参照できる文献として現在、河合隼雄（1967）と Meier C.A.（1968）の邦訳、そして高尾による全集第 2 巻の多くの論文を邦訳したもの（Jung, C.G.（1904-10））がある。Meier では 1908 年のバージョンとして紹介されている言語刺激リストがあり、Kast の英語版ともおおむね一致している。これは全集第 2 巻に掲載されている 1909 年の論文“Die Assoziationsmethode”（英訳“The Association Method”）に掲載されている刺激語に一致している。訓練の際に用いられることの多いこの 100 語のリストの掲載されたユングの論文は、邦訳書には掲載されていない。また、ドイツ語から英語への翻訳の際に、数語について順序の入れ替わりや誤訳が起こっているようである。

さらに、50 語のバージョンもいくつかあるようだが、残念ながらその出典を現在明らかにできていない。現在英語の訓練コースで広く使用されているバージョンとして、ここでは、Kast、Meier、Jung、河合を並べて提示し、②～④の問題も絡めて、提案を行いたい。刺激語に関する複

雑な問題を回避することはできず、いくぶんか問題を回避できると判断した訳語に改めた私案を表1に示した。個々の項目についての判断を表中に記した。

表1 刺激語リスト

	Kast 1980 (英訳版)	Meier 1908 (独語原著)	Jung 1909 (独語原著)	Jung 1909 (英訳版)	河合隼雄 1971	本稿での 日本語試案
1	head	Kopf	Kopf	head	頭	頭
2	green	grün	grün	green	緑	緑
3	water	Wasser	Wasser	water	水	水
4	sing	singen	singen	to sing	歌う	歌う
5	death	Tod	Tod	death	死	死去
「死」とすると「詩」と理解するものも多い。イントネーションによって区別できないため、ここでは「死去」を採用する。						
6	long	lang	lang	long	長い	長い
7	ship	Schiff	Schiff	ship	船	船
8	pay	zahlen	zahlen	to pay	支払う	支払う
9	window	Fenster	Fenster	window	窓	窓
10	friendly	freundlich	freundlich	friendly	親切的な	親しい
訳語として「親しい」を採用する。						
11	table	Tisch	Tisch	table	机	テーブル
Tisch からすると「机」とも「テーブル」とも考えられるが、英訳に合わせておく。						
12	ask	fragen	fragen	to ask	尋ねる	尋ねる
13	village	Dorf	Dorf	16 village	村	村
14	cold	kalt	kalt	13 cold	冷たい	冷たい
15	stem	Stengel	Stengel	14 stem	茎	茎
16	dance	tanzen	tanzen	15 to dance	踊る	踊る
CW 2 の英訳版では、13～16 の順番がなぜか入れ変わっている。ドイツ語原著に合わせておく。						
17	lake	See	See	lake	海	海
See の訳語としては Meer と区別し湖が正しいが、海に面していないスイスに比べ、なじみのある日本では、海の方が連想が広がるのではと考え、あえて「海」を採用した。						
18	sick	krank	krank	sick	病気	病気
19	pride	Stolz	Stolz	pride	誇り	プライド
「誇り」とすると同音異義語「埃」と区別できないので、「プライド」を採用した。						
20	cook	kochen	kochen	to cook	炊く	料理
21	ink	Tinte	Tinte	ink	インキ	インク
22	angry	bös	bös	angry	怒り	激怒
「怒り」とすると「錨」と思うものもあるので、「激怒」を採用する。						

23	needle	Nadel	Nadel	needle	針	針
24	swim	schwimmen	schwimmen	to swim	泳ぐ	泳ぐ
25	journey	Reise	Reise	journey	旅行	旅行
26	blue	blau	blau	blue	青い	青い
27	lamp	Lampe	Lampe	lamp	ランプ	ランプ
28	sin	sündigen	sündigen	to sin	犯す	罪
元は動詞であるが、「犯す」とすると罪のニュアンスが薄れると考え、「罪」を採用する。						
29	bread	Brot	Brot	bread	パン	パン
30	rich	reich	reich	rich	金持ち	豊かな
元の語は金銭ばかりを意味しないであろうから、「豊かな」とする。						
31	tree	Baum	Baum	tree	木	木
32	prick	stechen	stechen	to prick	刺す	刺す
33	pity	Mitleid	Mitleid	pity	同情	同情
34	yellow	gelb	gelb	yellow	黄色	黄色
35	mountain	Berg	Berg	mountain	山	山
36	die	sterben	sterben	to die	死ぬ	死ぬ
37	salt	Salz	Salz	salt	塩	塩
38	new	neu	neu	new	新しい	新しい
39	custom	Sitte	Sitte	custom	くせ	習慣
「くせ」とすると個人的な習慣を意味するため、原語に則し「習慣」を採用した。						
40	pray	beten	beten	to pray	祈る	祈る
41	money	Geld	Geld	money	金	お金
日常的に「お金」という人の方が多いであろうから、そうしておく。						
42	stupid	dumm	dumm	stupid	馬鹿な	愚かな
43	exercise-book	Heft	Heft	exercise-book	ノート	ノート
44	despise	verachten	verachten	to despise	軽蔑する	軽蔑する
45	finger	Finger	Finger	finger	指	指
46	dear	teuer	teuer	dear	高価な	高価な
47	bird	Vogel	Vogel	bird	鳥	鳥
48	fall	fallen	fallen	to fall	落ちる	落ちる
49	book	Buch	Buch	book	本	本
50	unjust	ungerecht	ungerecht	unjust	不正な	不正な
51	frog	Frosch	Frosch	frog	蛙	蛙
52	separate	scheiden	scheiden	to part	別れる	別れる
53	hunger	Hunger	Hunger	hunger	空腹	空腹
54	white	weiss	weiss	white	白い	白い

「連想実験」とコンプレックス理論

55	child	Kind	Kind	child	子供	子供
56	attention	aufpassen	aufpassen	to pay attention	注意する	注意する
57	pencil	Bleistift	Bleistift	pencil	鉛筆	鉛筆
58	sad	traurig	traurig	sad	悲しい	悲しい
59	plum	Pflaume	Pflaume	plum	あんず	すもも
「あんず」より「すもも」の方がより日常的に触れる語であろうから、ここでは後者とする。						
60	marry	heiraten	heiraten	to marry	結婚する	結婚する
61	house	Haus	Haus	house	家	家
62	love	lieb	lieb	darling	かわいい	かわいい
英訳としては“darling”あるいは“lovely”であるべきだろう。						
63	glass	Glas	Glas	glass	ガラス	ガラス
64	quarrel	streiten	streiten	to quarrel	争う	争う
65	fur	Pelz	Pelz	fur	毛皮	毛皮
66	big	gross	gross	big	大きい	大きい
67	carrot	Rübe	Rübe	carrot	かぶら	にんじん
訳語としては「かぶら」でも「にんじん」でも構わないが、ここではより日常的なものとして「にんじん」を採用する。						
68	paint	malen	malen	to paint	塗る	塗る
69	part	Teil	Teil	part	部分	部分
70	old	alt	alt	old	古い	古い
71	flower	Blume	Blume	flower	花	花
72	beat	schlagen	schlagen	to beat	打つ	打つ
ときどき「鬱」ととる者が見られるが、関西ではイントネーションが異なるので、「誤った理解」としている。同じイントネーションで発音する地方・出身者については、考慮する必要があるだろう。						
73	box	Kasten	Kasten	box	箱	箱
74	wild	wild	wild	wild	荒い	野性的な
「荒い」とすると意味が広すぎると考え、「野性的な」とした。						
75	family	Familie	Familie	family	家族	家族
76	wash	waschen	waschen	to wash	洗う	洗う
77	cow	Kuh	Kuh	cow	牛	牛
78	strange	fremd	fremd	friend (誤訳?)	妙な	奇妙な
まれであることを明確に表す語として「奇妙な」を採用する。CW 英語版の訳は誤りであろう。						
79	happiness	Glück	Glück	happiness	幸運	幸運
80	lie	lügen	lügen	lie	うそ	うそ
81	deportment	Anstand	Anstand	deportment	礼儀	礼儀

82	narrow	eng	eng	narrow	狭い	狭い
83	brother	Bruder	Bruder	brother	兄弟	兄弟
84	fear	fürchten	fürchten	to fear	怖がる	怖がる
85	stork	Storch	Storch	stork	鶴	こうのとり
河合（1967）はコウノトリが赤ん坊を運んでくるという話になじみのない日本人のことを鑑み、「鶴」とする試案を示しているが、現代日本では赤ん坊を運んでくるコウノトリの話は衆知と考えられるだろう。						
86	false	falsch	falsch	false	間違い	間違った
87	anxiety	Angst	Angst	anxiety	心配	心配
88	kiss	küssen	küssen	to kiss	キス	キス
89	bride	Braut	Braut	bride	花嫁	花嫁
90	pure	rein	rein	pure	清潔な	純粋な
混じりけのないというニュアンスをもった「純粋な」を採用した。						
91	door	Türe	Türe	door	戸	戸
92	choose	wählen	wählen	to choose	選ぶ	選ぶ
93	hay	Heu	Heu	hay	乾し草	干し草
94	contented	zufrieden	zufrieden	contented	嬉しい	満足した
訳語として「満足した」が適切だと考えた。						
95	ridicule	Spott	Spott	ridicule	あざける	からかう
「からかう」が日常的表現であると考えた。						
96	sleep	schlafen	schlafen	to sleep	眠る	眠る
97	month	Monat	Monat	month	月	月日
「月」とすると天体の月と多くの場合理解するだろう。それも意味はあるだろうが、ここでは原語の意味合いが伝わるように「月日」としておく。						
98	nice	hübsch	hübsch	nice	きれいな	きれいな
99	woman	Frau	Frau	woman	女	女性
「女」という言い方は他の含意をもつと思われ、「女性」としておきたい。						
100	insult	schimpfen	schimpfen	to abuse	侮辱	侮辱

今回は訓練コースで用いられているものを基本と考え 100 語のリストを提案している。実用的には 50 語程度のものの方が時間的には導入しやすく、今後臨床的に意義ある 50 語のリストを作成できればと考えている。

(d) 第 1 施行

I 時間の計測

Kast では次のように記されている。すなわち、刺激語については、最初の強勢母音が読まれた

ときに時間の測定を始め、反応語については最初の文字が発話された時に時間の測定を終える、という基準である。日本語の場合、子音プラス母音が1対となっているため、刺激語によって最初の母音からその語が読み終わるまでに時間の差が大きくなってしまいます。例えば、今回例に挙げる刺激語リストの内、44「軽蔑する」は6音節であり、それに対して5「死」31「木」91「戸」といった1音節語もある。仮に1音節0.2秒で発話したとすると、1秒分の差が生じる。河合(1971)によれば、ユングのあげている一般成人の平均時間は1.8秒であるから、この差は決して無視できない。反応時間については英語版と同じく、最初の音の発語を採用するにしても、刺激語のどの部分で計測し始めるかについては、より合理的な基準が求められる。反応生成過程が、刺激語を聴覚的に知覚した時点から始まるとすれば、刺激語の音節のすべてを外部刺激として把握できた時点からと考え、ここでは検査者が刺激語を言い終わると同時に計測し始めることを提案する。

II 反応の失敗

Meierでは40秒、Kastでは30秒経過しても反応が得られない場合に、反応の失敗とされている。しかし、これほど反応が出されない例はまれである。Vezzoli.C. et.al. (2007)では6秒経過した時点で反応の失敗としている。とりあえず、30秒としておくにしても、指標として働くことはまずなく、反応時間の遅れを精査する方が实际的であろう。

III 第1施行時の観察からえられるコンプレックス指標

コンプレックス指標の内、第1施行時に実施しながら記録しておくべき項目については後に述べる。

(e) 休息

Kastでは第2施行に移る前に20分間の休息を取ることが記されている。しかし、実際問題として、特に話すこともなくその場に20分間ともにいるのは難しい。当初、筆者は訓練時に20分を守るために、クライアントに検査手続きをあらかじめ説明しておき、休息の時間には少し離れたところに移り言葉を交わさないようにして20分を過ごした。しかし認知的な再生能力を問うテストではなく、個人の中でのコンプレックスをとらえるという目的のためには、この20分を必ずしも遵守しなくとも構わないと現在では考えている。休息という意味を果たし、かつ自然な流れとするためには、10分程度の休息でも十分だと考える。とりあえず、伝統的には20分とされており、可能なら20分、変更したのならレポートにもその旨を記しておけばよいだろう。

(f) 第2施行

休息後、次のような教示によって第2施行を開始する。

「今度も先ほどと同じ語を読み上げていきます。先ほど答えたのと同じ語が思い出せるときはそ

の語を答えてください。もし答えた語が思い出せないときは、新しく思いついた語を答えてください。』

この際に配慮すべきは、再生できるかどうかの能力テストのような圧力がかからないようにすることである。それぞれの語が再生できれば+、できなければ-の符号を記し、新たに連想された語を書き加える。

(g) 第2施行後の感想

テスト試行後に被験者にどのような感じがしたか、どのようなことを考えたか等の感想を求める。多くの被験者は自らの経験を語ろうとするだろう。時にはコンテキストにあたる内容が、質問しなくても語られるであろうし、コンテキスト解釈のためにも記録に残しておく必要がある。

(h) 検査者によるコンプレックス指標を用いた評価

伝統的に行われてきた資格候補生のための訓練課題としての AE では、Kast や Meier, C. A. (1968) に記載されたコンプレックス指標を用いてきている。指標そのものや数的処理の妥当性については、あげ出すと切りのないくらい問題点が見つかるであろう。ここでは、まずは伝統的に行われている手続きを明示し、問題点を挙げ、改変の可能性を示すこととする。

I 反応時間の遅れ (Prolonged RT)

まずは、以下のような手続きを行う。

i. 伝統的には反応時間 (RT) を 1 / 5 秒単位で計測することとなっている。例えば、2.4 秒の反応時間であれば、RT は 12 と示す。2.3 秒であれば、RT は 11.5 となり、繰り上げて 12 としておかざるをえない。本来 1 / 5 秒単位とすることの意味が感じられず、現代では、秒数そのままを記す方が賢明かもしれない。ともあれ、伝統的にはそのような数え方であることは確認しておく。

ii. RT の頻度を記録する。RT ごとに頻度を示しておくことで、ある反応が他の反応から逸脱した反応であることがわかる。

iii. 前半 (1-50) と後半 (51-100) それぞれの中央値 (probable mean, median) を求める。大きな逸脱があっても中央値であれば影響を受けないので、平均値から偏りの評価とは別に指標としておくべきであろう。今回は文献的裏付けをえられなかったが、前半と後半を分けることになったのは、おそらくはクレペリンの発案に倣ったものであろう。現在用いられる心理検査の中で、こうした前半と後半を分けて評定するものの代表例として、内田-クレペリン検査と PF-スタディーがある。作業検査である内田-クレペリン検査では、前半での疲労が休息後、どういった影響を与えるかを見るために、きわめて重要である。そして、前半と後半で作業曲線や作業量が

どれほど異なっているかは、性格検査・能力検査としてなくてはならない指標となっている。しかし、PF-スタディーやAEでは、前半と後半の間に休息を挟むわけでもなく、ただ用意された項目数の半分で恣意的に区切り、かつ疲労の影響も内田-クレペリン検査ほどはないと考えられる。それ故、前半と後半の比較は重要な指標とは考えがたい。ここでは、Kastが提示している内容を簡単にまとめておくこととする。

Kastによれば、通例、疲労のために前半のRT中央値が8-9であるのに対して、後半では9-10程度まで遅れる。これに対して、後半が14-15程度にまで遅れる場合、ストレス状況に弱く、大きなコンプレックスの賦活があったことが予想される。逆に、前半が12-13であったものが、後半で9-10にまで速くなる場合、内向的で抑制的な被験者が、テスト状況に慣れ、自由に反応できるようになった可能性をあげている。いずれにしろ、前半と後半とで大きな差がある場合は、検討してみるべきであろう。

iv. 中央値より2/5秒以上かかったものを遅れと見なす。

Kastでは中央値より高いものすべてを遅れと見なしているが、この場合、前後半ともに25項目が選び出され、同等に指標に1が加えられてしまう。Meierは、中央値より2/5秒以上かかった項目を採用している。特に反応の遅れが大きいものに注目するために、中央値から2/5秒(0.4秒)の遅れのものに指標の得点として1点を付加し、Vezzoli, C. et al. (2007)の反応の失敗の基準に倣い、6秒以上かかったものには2点を加えるというのも一案かと思う。ともあれ、指標の得点だけではなく、大いに遅れや混乱をもたらした語には、点数以上の注意を向けるべきである。

II 「無反応」(no reaction) あるいは「失敗」(failure)

先にも記したとおり、経験的には30秒以上かかることはまれであり、あるとすれば反応の拒否であろう。「これは思いつきません。」「浮かばないですね。」といったコメントがある場合、<もう少し待ちますね。>くらいの返答で、30秒は待ってみるのも一法である。こうした語については、指標の得点だけではなく、被験者の連想や感想を求めることで有意義な資料がえられるかもしれない。

III 「再生の欠如」(lack of reproduction) あるいは「誤った再生」(false reproduction)

第2試行での再生欠如 または誤った再生に付与する指標である。Kastによれば100語中誤った再生の平均は21であるが、筆者の経験では多くの場合それよりもずっと少ない。認知的能力との関連は当然のことであり、他者との比較により記銘・再生力を吟味するのが目的ではないのだから、個人の結果の中で、特定の語に起こるとすると、特定の語で起こった意味に注意を向けるべきであろう。認知的記銘力の障害により指標が与えられる例では、AEの適応の是非が問われなければならない。

なお、「誤った再生」については、第 2 施行終了時に感想を求める際に確かめてみるべきであろう。これは、次に述べる指標「誤った理解」でもあり得ることであるが、発話のみで刺激語を与えているので、聞き違いもありえる。例えば、第 1 施行で 40「折る」と「折る」と聞いて「割り箸」と答えながら、第 2 施行では正しく「折る」と聞いて「誤った再生」と評価されるかもしれない。時に、検査者の発話の仕方も影響するであろう。WAIS の単語の問題のように、文字を提示して音声を伴わせる方が正確ではあるが、自由に連想がもたらされるという意味では、音声のみの方がより適当であろう。

IV 「刺激語の反復」(repetition of the stimulus word) あるいは「誤った理解」(misunderstanding or not understanding the SW)

「刺激語の反復」として指標をつけるには、それが反応なのか、反応産出前のつぶやきなのかを区別しなければならない。多くの場合、後者であり、待っていれば反応が与えられる。その際、つぶやきに様々な情動反応が読み取れるであろう。指標とはしないまでも、その情動を書き留めておくことは資料として重要であろう。

「誤った理解」については、Ⅲでも述べた。誤った理解としてしまう前に、検査者の発話や被験者の語の理解について、認知的な水準での確認が必要であろう。

V ものまね、身振り (mimic, movement) の付加

反応語に物まねや身体の動きが加えられる場合である。89「花嫁」という刺激語を聞いて、桂三枝のテレビ番組を思い浮かべ「いらっしゃーい」と物まねする、40「折る」という刺激語を聞いて文字通り手を合わせて頭を下げるといった例が挙げられる。

VI 口ごもり 発語の誤り (stuttering, mispronunciation)

語の意味だけでなく、発話の際の口ごもりや発語にも注意を払う。

VII 音響あるいは音韻反応、引用反応 (“clang” reactions, rhymes, quotations)

反応語の意味に関与せず、音や引用を用いた表面的な連想と考えられる場合に付加する。Kast は音響反応の例として stalk-walk をあげている。日本語の場合、39「習慣」に対して「主観」と反応するような例が挙げられる。引用反応の例としては、81「礼儀」に対して「作法」と答える例が考えられる。

VIII 無関係な反応 (disconnected reactions) あるいは間接的反応 (undirect response)

反応を聞いただけでは判断しかねる場合も多い。反応語が思いつかないときに、まれではある

が目前にある事物をあげるような場合もあれば、反応を聞いただけでは検査者には想像もつかない反応をする場合もある。例えば、48「落ちる」-「夢」に対して、コンテキストを求めると、「落ちる夢ばかり最近見る」という場合、被験者の中ではつながりはあるわけである。これなどは、ユングが ego-centric と分類したものの例であろう。さらに、ユング (1904-10) は「刺激語と反応語との間に新たな中間項を導入することによってのみ理解できるような反応様式」として「間接的反応」をあげている。例えば、「白い」という刺激語に対して「広い」と答えており、その中間に「雪原」が導入されている場合である。コンテキストで中間項の導入が確認できれば、間接的と問題なく分類できるが、ユングはどのような内容が介在しているか意識していない場合もこれに該当するとしている。その場合、無関係な反応との区別はしがたいはずである。そこでここでは、2つを特に区別することなく、語としてのよくある意味の連関を離れ、その被験者独自の反応を喚起したと考えられる場合、コンプレックスを喚起したものとして指標を加えておくことを提案する。

Ⅹ 多数の語・文を用いた反応 (reactions in many words or sentences)

1語で答えるという教示から外れた反応であり、例として74「野性的な」に対して「毛むくらじな男が目には浮かびます」とか、24「泳ぐ」に対して「水泳だけは昔からいやでしたね」といった回答があげられる。

Ⅺ 造語、ののしり (毒舌)、独特のなまり (言い回し) (neologisms, strong language, colloquialisms)

被験者独自の造語や激しい言葉、奇異な言い回しを指標とする。

Ⅻ 反応語の反復的使用 (stereotypes)

ここで言うステレオタイプとは平凡な反応という意味ではなく、同じ語が複数回にわたって用いられることを指す。第1・第2施行を合わせ、同じ語が3回以上用いられた場合、付加する。

Ⅼ その他のコンプレックス指標の可能性、あるいはコンプレックス指標としては表せないコンプレックスの働きについて

今回は Kast と Meier を中心に、以上 11 の指標を提示した。これ以外にも Meier は外国語反応、感嘆や叫び、言い間違えも加え、さらには皮膚電気反射や呼吸運動描写器の導入にも触れている。あとの2つはともかく、最初の3つが指標にあたると思われる場合には加えた方がよいであろう。

さらに、指標としがたい事象にも触れておく必要がある。まずは「固執反応」(perseverations)

についてである。しばしば起こることであるが、ある特定の刺激語のあと、それまでとは異なり、反応時間が遅れ続けたり、表情や口調が大きく変化したりといったことがある。この場合、上記の基準ではその特定の刺激を喚起した語が指標によって正当に評価されない。この場合、感想やコンテキストの確認によって、情動負荷の引き金となる刺激を特定する必要がある。そして、その語について深く考察し、引きずられて生じた事象については得点も差し引いて考える必要がある。つまり、得点が高いからといって、かならずしもその刺激語が引き金となっているとは限らないということである。

あるいは著者の経験したある被験者は、刺激語を聞いたあと、必ずその語を反復し、その後反応するのだが、数語については反復せずに考え込んだ。この場合、反応として「4) 刺激語の反復」とはスコアできず、反復はよくあり、反復しないで考え込む場合の方が、情動負荷が高いとも考えられる。そうした意味で、指標を見直したり加えたりする可能性に開かれておくべきであろう。繰り返すが、AE の標準化を目指すのではなく、被験者のコンプレックスを推測することが目的である場合、適宜指標を調整しながら行うことが推奨される。

(i) コンテキストを求めるセッション

実験施行のあと、1日から1週間空けたあと、刺激語と反応語との関連についての連想や注釈を求める。検査者は、コンテキストを求めるセッションまでに、コンプレックス指標をまとめ、尋ねる語の対を選び出しておく必要がある。指標の数が多いもの、情動負荷が高いと考えられるものを選び出すが、仮に50分のセッションで終わることを考えると、100語の内50語も扱うのは難しい。30～40位を目安に、高い指標を示すものは必ず盛り込む。その内、指標得点のやや低いものから導入し、高いものを中心とできるよう順番の工夫が必要だろう。1週間もすると被験者本人も施行時の着想を忘れてしまうかもしれない。同じ週のうちに行えれば1番よいが、多くの場合、1週間に1回のセッションをもつ例が多いであろうから、1週間後となるであろう。記銘と再生の力を見るわけではないから、刺激語に対する反応語の想起を求める必要はない。仮にユングの言うエゴ・セントリックな反応であったり間接反応であったりしても、いくぶんかその被験者なりの脈絡をすくい上げられることを目的とすればよい。例えば、以下のような尋ね方でよいだろう。

「塩という語がありましたが、これには腐敗と答えられています。塩-腐敗というつながりはどんなふうに思いついていたのでしょうか？」

施行時の着想について明確に述べられるものもあれば、忘れてしまったと述べるもの、あるいは何となく思いついたとしか答えられないものもあるだろう。指標としてはあげられないが、ここでも情動負荷の高まりを感じたり、連想が沸々とわき出すのを感じたりすることもあるだろうし、その内容とともに解釈には組み入れるべきである。

(3) 結果のまとめと考察

訓練のために施行したのか、あるいは担当する事例の理解を深め、プロセスを促進するために施行したのかによってレポートのまとめ方も変わってくるだろう。ここでは、訓練途上のレポートで最低限必要となることを提示することにし、後者の目的のためには各人が工夫されたい。

(a) 被験者の概要

AEの目的からして、いわゆるブラインド・アナリシスは無益に等しい。なぜなら、自我と無意識との関係を抜きにしたコンプレックス素材を問題にすること自体に無理があるからである。また、既知の事柄との照合を行っただけでもメリットはない。多くの場合、自らが担当する臨床ケースが対象であろうし、すでに手元にある情報も考察の素材とすることになるだろう。そうした意味で、解釈仮説を展開する前に、事例の概略は報告に記載すべきである。

(b) 結果のまとめ

まとめを見れば、被験者の反応やコンプレックス指標がおおむね見渡せることが望まれる。結果の例として、広瀬（2013）が事例において示したのもも参照されたい。

I 反応時間の頻度

古典的には、前半50語・後半50語それぞれについて、頻度を示す方法がとられている。先にも述べたように、秒単位での正確な時間を記しておいてもよいだろう。

II 使用したコンプレックス指標

ここで述べた「連想実験」の目的を鑑みるに、既成の指標だけに従うよりも、被験者のコンプレックスがより明確になるような工夫がなされることが推奨される。もちろん、反応時間の遅れの重要性は誰もが認めるところであろうが、改変した点とともに用いた指標について示しておくことが必要であろう。

III 反応一覧

刺激語に対する反応語、指標の数、反応時間、その他の特記事項、再生の成功と失敗及び新たな再生語が一覧できるようにしておくとうわかりやすい。本来、重要性や意味の異なる指標を得点化して加算することには問題があり、コンプレックス指標の欄に、該当する指標の種類を明記しておくのも役立つだろう。

IV 反応時間・指標数グラフ

コンプレックス仮説を導くために、最も役立つグラフである。Meier は刺激語ごとに反応時間をグラフ化し、さらに該当する指標も示している。これにより、反応時間が遅く指標の数が多いものがわかるだけでなく、時間の推移の中で、固執反応やその他のコンプレックスの現れが推測しやすくなるであろう。

(c) 解釈

I 形式的・量的側面

反応時間等、内容以外の指標の特徴を踏まえて解釈を行う。この段階では、Jung が描いた反応の再分類を参照することも役立つだろう。そこでは、一つ一つの意味合いについては触れられてはいない。しかし、ある種の発達障がいのある被験者が、概念での連想よりもむしろ語音連想を多く示すというような例は、臨床場面で用いれば経験されるであろう。古典的な特徴を現代の臨床場面で新たに意味づける試みも可能かと思われる。

II ダイアグラム

指標の内、特に高得点のものを柱として、核となるコンプレックスを推測する。反応時間が大きく遅れたもの、指標の数が飛び抜けて多いものを数個選びだし、それを柱として他の側面の特徴を絡めて解釈していくと意味が浮かび上がることが多い。

III 場合によっては、試行後の感想からの解釈

施行した直後の感想の段階で、被験者自らが印象に残ったことを語ることもしばしばあり、その中に重要な素材が含まれていることもある。例えば、ある刺激語に対して頭が真っ白になったとか、別の語が思いついたが言えなかったとか、感想を求めなければえられないことが語られるだろう。

IV コンテキストからの解釈

被験者の語るコンテキストの内容に十分配慮することは、検査者が語と語のつながりを恣意的に意味づけることを防いでくれる。意味や情動の力動的連なりを拾い上げるために、コンテキストの絡まりに注意を払うことは非常に重要である。

V 場合によってはコンテキスト聴取後の感想からの解釈、その他の付加すべきことがら

心理療法の一過程としての意味をもっているなら、被験者が夢素材や重要なエピソードと同じように、AE から自らについての気づきや課題について語ることもしばしばあるだろう。あるいは

は、検査者の方から解釈を仮説として提示することが意味をもつこともあるだろう。そうしたやりとりも一連の作業プロセスとして記しておきたい。

(d) まとめ

以上のような観点から考察した内容について、その骨子が明確になるようにまとめておく。特に、中心的なコンプレックスが意識的生活に及ぼしている影響については記しておく。場合によっては、今後のセラピーでの見通しや方針を付加する。

3. おわりに

以上、ユング派の訓練コースにおいて、現在でも取り入れられている「連想実験」（あるいは「言語連想検査」）について、その意味合いを押さえつつ、施行手続きを試案として提示した。連想実験は、テスト・バッテリーの1つとして取り入れられるテストとは大きく趣が異なり、検査者自身がある意味「入れ込んで」いなければ解釈はおろか施行することにすら気が向かない試みである。この入れ込みは、理論的にはコンプレックス理論に負うところが大きく、また自らの体験との照合により、その意味合いが感得できるところがある。また、夢や箱庭に接する時のように、心理療法家自身のコンプレックスの賦活や逆転移の喚起をも想定しながら解釈仮説を構築することになるであろう。最後にお断りしなければならないのは、本試案はコンプレックスを照らし出す鏡として、さらにその妥当性を検討する途上にあるということである。実用性や有効性を巡って、数年後にはさらに異なった提案を行う可能性もあるが、現時点での布石として本稿はそれなりの意味をもつであろう。客観的で信頼性のあるテストとは異なるこうした試みの意味をいくぶんかなりとも醸し出すことができていることを期待しつつ、筆を置くこととする。

参考文献

- Bisagni, F. (2009) : Lost in Speed, Lost in Meaninglessness. Latency Subverted. in Bisagni, F. et al. (2009) : Jung Today : Volume 2-Childhood and Adolescence. Nova Science Pub Inc
- Fordham, M. (1969) : Children as Individuals. Free Association Books.
- Hill, J. (1975) : Individuation and the Association Experiment. In Spring 1975, An Annual of Archetypa 1 Psychology and Jungian Thought. Spring Publications p145-151
- 広瀬 隆 (2013) : Jung, C.G. が提唱した「連想実験」の一事例 (仮題) 帝塚山学院大学心理教育相談センター 紀要第9号 (印刷中)
- Jung, C.G. (1902) : Zur Psychologie und Pathologie sogenannter okkulten Phänomene. 宇野・岩堀・山本 訳 (1999) : C.G. ユング 心霊現象の心理と病理. 法政大学出版局
- Jung, C.G. (1904-10) : CW 2 (全集第2巻の多くの論文は以下の邦訳書に含まれる。高尾浩幸訳 (1993) : 診断学的連想研究 人文書院)
- Jung, C.G. (1968) : C.G. Jung. Analytical Psychology : its Theory and Practice. The Tavistock Lectures, Routledge & Kegan Paul Ltd, London. 小川捷之訳 (1976) : 分析心理学. みすず書房

- Kast, V. (1980) : The Association Experiment in Therapeutical Practice. (English Ver.) For student use only
- 河合隼雄 (1971) : コンプレックス. 岩波書店
- Meier C.A. (1968) : Lehrbuch Der Komplexen Psychologie C. G. Jung : Die Empirie des Unbewußten. 河合隼雄監訳 (1996) : 無意識の現れ－ユングの言語連想検査にふれて. 創元社
- 氏原・成田・東山・亀口・山中編 (2004) : 心理臨床大事典 培風館
- Vezzoli, C. et.al. (2007) : Relationship and Complexity : Theory of Complexes and Attachment. in Bisagni, F. et al. (2009) : Jung Today : Volume 1 -Adulthood. Nova Science Pub Inc
- Winer, R. I. (2005) : Jung's Word Association Test with Correlation from a Clinical Case (電子版)